

我が日本民族をキリストへ

# 日本民族総福音化運動協議会

Movement of Evangelizing All Japanese

第52号

## 伝道のパレット、それが民福協



日本民族総福音化運動協議会・理事  
CBMCアジア・理事

井上 義朗

日本民族総福音化運動協議会(民福協)といえば、その印象は保守的な

雰囲気、個性の強い信仰者の集まりと感ぜられているかもしれない。しかし、それは、日本における宣教の現状を何とかブレイクスルーしようとの並々ならぬ思い、「鴻鵠の志」と言える思いが凝縮している故だと思っております。

元来、日本人のアイデンティティは、他国の人々に「日本人になりたい」と思われるほどの素晴らしいものでした。日本人のアイデンティティを世界に知らしめたもの一つに、新渡戸稲造が著した「武士道」があります。日本がロシア艦隊を打ち破った時代背景もあり、ルーズベルト大統領も愛読したほどに世界に広まりました。もともと、札幌農学校で共にクラーク博士の薫陶を受けた内村鑑三は、義と愛、自己犠牲を説く、この書を高く評価しながらも、キリスト教の核心を加えたなら、より高次元に

なっただろうと指摘しています。

しかし、次第に形だけの西欧化と近代化に傾倒し、「武士道」の良きものは失われました。所謂、和魂洋才で西洋の文明は取り入れつつ、精神性は日本の方が優れていると思いがり、世界大戦に突入してしまいました。そして今や家庭が崩壊し、意味のない殺人や、親が子を殺めるような事件も珍しくなくなっています。

### 何故でしょうか。

日本人が精神的な支柱を持たないで生きているからではないでしょうか。キリスト教には現状を変える力があるのに、なぜに日本人とキリスト教の間の溝が縮まらず広がるのでしょうか？民福協は、あらゆる方向からタブーを作らずにその問題を決済しようとしています。

\*\*\*

日本全体の福音化の為には、上からの伝道でなく、信徒一人ひとりが

身近なところから社会のあらゆる階層に伝えなければなりません。信徒が如何に伝えられるかを考え、伝道の壁を取り除く方法を理解しなければなりません。民福協はその方法を見出そうとしています。

\*\*\*

日本宣教に於ける壁と考えられるものとしては次の4点が挙げられます。

1. 西欧宗教の日本文化との摩擦
2. 日本人の精神性
3. 歴史的経緯
4. 文化の根っこ

民福協にはこれらの問題を個々に深く研究しているメンバーが揃っています。研究がゴールでなく、壁を乗り越え宣教を進める為にです。順に少し内容に触れていきます。

### 1. 西欧宗教の日本文化否定

そもそもキリスト教は中東のイス

(次頁につづく)

ラエルでユダヤの人びとに伝えたものでした。しかしながら、異邦人伝道を示された神は、使徒に命じて、ご自分の教え、キリスト教をユダヤ人の枠を外して広められました。キリスト教は、ローマの文化を取り入れながら帝国の拡大と共に大陸に広がります。「西回りの伝道」です。救いの本質を伝えることに重点が置かれ、異教を排除して、文化的適合による伝道を進めました。

西多賀聖書バプテスト教会の高橋清牧師は牧師であり、東北大学の農学准教授でした。高橋先生が、研究者の道に進むに際して、上司に研究者に必要な資質を尋ねられました。また、先生は後に牧師となる決断の時にも、尊敬する師に牧師の資質を問われました。先生に答えられた、研究者と牧師に必要な資質は、なんと共に「フレキシビリティ」だったとの事です。コロナウイルスは、触手のようなスパイクタンパクを動かして、肺、心臓、血管などの細胞に受容体を見つけて接合します。スパイクに親和性(フレキシビリティ)があるからです。その後、ウイルス自身の膜と細胞膜を融合させます(土着化です)。民福協の意図するプロセスと同じです。そして細胞膜を通過させてウイルスの遺伝子RNAを細胞内に送り込みます(イエス様の愛の伝道です)。この様に伝道の為には、日本文化へ適合する柔軟性が求められます。

## 2. 日本人の精神性

一神教であることの排他性は、和と尊ぶ日本人に受け入れにくいといわれています。しかし、十字架により神との隔ての幕は破られ、ペテロには異邦人伝道を示されました。また、ヨハネ8章3節以下では姦通の女を赦され、そしてまた良きサマリヤ人たれとイエス様は教えています。ここにあるのは、排他性ではなく、全てを覆いつくすイエス様の大きな愛だと思えます。

イエス様による教会の一致は、画一性を意味せず、イエス様のもとの多様性は分裂を意味するものではないと言えます。

## 3. 歴史的な経緯について

大海洋時代に植民地化の動きの中で、日本にキリスト教は伝えられました。しかし、そこには植民地化の意図が隠されていました。時は、戦国時代であり、武士の国日本は異国を遠ざけ、キリスト教は迫害されました。日本人にはキリスト教は迫害を受けた異国宗教と映ります。植民地化されなかつた日本はキリスト教化もされませんでした。

私は、CBMCという世界規模の信徒伝道団体活動を通じて、アジア諸国のクリスチャンに多くの友人がいます。92%がクリスチャンのフィリ

ピンが何故に政治が腐敗し賄賂が横行して、インフラも整わず、治安も悪いのかとの会話の中で、フィリピンの友人は、「信仰が植民地支配国による押しつけの信仰であり、自らの渴きによる信仰でないためだ」と言いました。(第二次大戦後の占領期を除いて)他国に支配されたことのない日本の歴史は貴重であり、次に述べる「東周りの伝道」の歴史も併せて深い考察が重要です。歴史背景の正しい理解により、日本に相応しい伝え方が導かれるでしょう。

## 4. 日本文化の根っこ

文化適合の行きつくところは、根っこである日本宗教にぶつかります。日本宗教とは、神道と仏教です。紀元二世紀に朝鮮より渡来した大秦(秦)宿禰を始めたとする秦氏の研究が鍵となります。

秦氏はユダヤ10部族に繋がり、ヤハタと呼ばれる唯一神の信仰を持っていました。そして秦氏は、「伊勢」という日本で最も古い神社を建てたとされます。

紀元八一五年発表の「新撰姓氏録」によると、日本の支族は3種に分かれます。

「神別」|| 最初に日本に渡ってきた集団です。

「皇別」|| アマテラスに繋がり神武天皇を祖とする皇族です(最初の神道の祭司で、その中にはイスラエル

の祭儀に似た痕跡が多数ある)。

「蕃別」|| 朝鮮などからの渡来民族で当時の人口の37%を占める人たちです。彼らは文化、経済的に最も進んだ階層を形成していたとされます。また、空海は唐の青龍寺で恵果から大乘仏教の密教を伝授されましたが、空海は、秦氏ゆかりの讃岐出身です。さらに真言宗高野山金剛峰寺には「大秦景教流行中国碑」のレプリカが建てられ、真言宗僧侶は「真言宗は景教から来ている」と明言しています。

手束先生が「初代教会の聖霊ダイナミズムを保持した」と言われたネトリウス派キリスト教の景教は秦氏や空海を通して、日本に深く入り込んでいきました。大胆に言うならば、大多数の神社や寺もネトリウス派キリスト教の教会とも考えられるのです。

以上のように、民福協は、伝道の壁を破るテーマを深く研究しています。これらの切り口は、宣教の絵を描く為の絵の具です。そして、民福協は多彩な色の絵の具のせるパレットです。多彩な絵の具の研究者であるメンバーは、パレット上で混ざりながらより良い、伝道に適した色を出します。

我々は、多くのキリスト者が、このパレットを福音化に利用して頂くことを願っております。

(連載)

## 創造論の基本的考え方 ③



日本民族総福音化運動協議会 理事  
レムナント出版 代表

久保 有政

## 「地球と太陽の誕生」

前回は、科学は聖書に近づきつつある、ということを見ました。では、地球誕生に関する科学理論についてはどうでしょうか？

聖書に「この世の最初のちりも造られなかつたとき・・・」(箴言8章26節)という言葉があります。宇宙に造られた元素は、「最初のちり」を形成していったのです。

現代の科学者たちも、私たちが住む地球は、もともとは宇宙の小さなちりが数多く集まって出来たものと考えています。

東大の松井孝典教授は、地球物理学に基づいて、地球は次のような過程を経て誕生したとしました。はじめに原初の太陽系は、チリ・アクタの漠然とただよう巨大な雲のようなものでした。

しかしそれはやがて重力のために次第に収縮し、回転しながら扁平なものになっていきます。そしてある程



微惑星衝突期 (想像図)

度チリ・アクタが寄り集まると、重力のために、数多くの塊に分かれ、そこに直径十キロメートル程度の無数の「微惑星」が誕生したであろうといえます。

このような変化は物理法則によって推定できます。そして誕生した無数の微惑星は、衝突や合体を繰り返して、あるものは雪だるま式に大きくなっていったでしょう。

そのような過程を経て、大きくなつていったのが、地球や、その他の惑星だと言われているわけです。現在の月面に見られる数多くのクレーターや、地球にも存在する幾つもの大隕石孔は、この微惑星衝突期のな

ごりとされます。

微惑星の衝突・合体が盛んだったときは、衝突の際に生じるものすごい熱のた

めに、地球の表面はどろどろに溶けて、混沌としていたでしょう。聖書にも、

「山もまだ定められず、丘もまだなかつた時」(箴言8章25節)「地は形なく、むなしく」(創世記1章2節口語訳) あつたと記されています。そのときは「山」も「丘」もまだ定められてはおらず、地球は混沌としていました。そのち地球は形を整えていったのです。

このように科学の説明は、まだ多少の違いはあつても、しだいに聖書の記述内容に近づいてきていることがわかります。

\*\*\*

次に太陽の誕生についてです。創世記に、

「神が『光よ、あれ』と仰せられた。：神はこの光を昼と名づけ、このやみを夜と名づけられた。こうして夕があり、朝があつた。第一日」(創世記1章3～5節)

と書かれています。この光は地球に夕と朝をつくつたので、(現在の)太陽の位置にあつた光です。ところが太陽自体は、天地創造第四日に造られています。

「神は二つの大きな光る物(太陽と月)を造られた：：第四日」(創世記1章16～19節)

この「造られた」という言葉の原語のヘブル語は、無から有を造る創造という言葉ではなく「有から有を造る」という言葉です。つまり第一日



二つの大きな光る物 (想像図)

太陽に整えられたということです。

現代の科学者も、じつは同様に考えているのです。東大の小尾信弥教授によれば、原始太陽はまず巨大な「ガス雲」として誕生し、それがある程度収縮して温度が高められ、爆発的に輝きだしました。

それは、自転を始めていた原始地球に、夕と朝、昼と夜をつくつたのです。これが第一日目のことだったのでしよう。しかしこの時の原始太陽の直径は、現在の太陽よりもはるかに大きいものでした。

またこの段階では、まだ水素の核融合反応は行われていなかったのです。けれども創造第四日には、ガス雲はさらに収縮して中心部の温度が一千万度以上の高温になり、核融合反応が始まりました。

現在の太陽は核融合でエネルギーを得ている天体ですので、このとき現在の太陽が誕生したのです。これが第四日の出来事だったと考えられます。

目に、太陽系に原始的な状態の太陽が存在するようになったけれども、それが第四日目になつて、現在のよう

連載  
第7回  
(最終回)

## わたしの日本宣教論

徒然草



聖書と日本フォーラム  
仙台館(やかた)家の教会会員

佐藤 博

### 日本人の心、

# 『もののあわれ』について

## 漢文訓読という

### 超訳

日本の精神の自己認識として「日本人の心」を説明しようとする時に出されるキーワードが、「もののあわれ」という言葉です。

しかし日本人なら誰もが知っているように、これほど説明に窮する言葉はありません。

かつて日本には自分たちの言葉を記す文字がありませんでした。しかしギリシャ文明も含め殆どの民族がそうであり、日本だけの事情ではありません。

一つの言語がその言葉によって自

ら語り、それを文字として確定させるという意味は、それ自体再び生身の言葉に還元され、内側から民族の精神を規定してしまうのです。

現在グローバル言語と称される英語を筆頭に、印欧語族の始祖と目されるギリシャ語もこれをギリシャ語とする為にはフェニキア文字を借用し、もっぱら音だけを表わす文字の組み合わせによって言葉を作りました。それがアルファベットです。それに対し、我らの先祖が出会った最初の文字は漢字という表意文字であり、同時に表音文字でもあったのです。例えば「山」という漢字を「サン」と発音すれば、中国語の音韻が日本人の脳裏をかすめはします。

しかしこれを「やま」という和語に言い換えれば、日本人の心が蚕食される事はありません。しかしどちらが音で、どちらが訓かという判別は誰でも知っています。

そういう点からいえば「もののあわれ」を「母乃能阿破礼」と記しても、中国人には分かりません。かといって「物の哀れ」や「者の憐れ」では、日本人にも分かりません。「日本人の心」を解読する指標ともいふべき「もののあわれ」は漢字が到着する前に、日出処に来ていたという訳です。

### 〈万葉集に込めた無常〉

奈良時代に編纂された日本最古の歌集、それが万葉集です。「万葉の心」をそのままに謳った約四千五百首の和歌、上は天皇や貴族から防人まで、下は民百姓や遊女、詠み人知らずに至るまで、そこに漂う無常観と「日本人の心」に纏わりつく「もの」の影は挽歌、恋歌、戯れ歌をはじめ或る種の悲哀や喪失という世界観から無縁の「もの」は殆どないの事です。

それが名詞的な「物」であれ、終助詞「もの」としての用法であれ、同様であるとすれば上代日本人の心に刻印された「ものあわれ」とは、何を物語っていたのでしょうか。

例えば大友旅人が巻第五に曰く、「余能奈可波牟奈之伎『母乃』等志流等伎子伊与余麻須万須加奈

之可利家理」。この漢字の羅列を、「世の中は 虚しき『もの』と知る時し、いよよ益々悲しかりけり」と読める日本人が何人いるでしょう。また現代日本語の接頭辞にも残された「もの悲しい」や「もの寂しい」の用例も、「悲しかったこと」や「寂しかったこと」の様々な出来事から具体的実相を削ぎ落として最後に残った「もの」であり、「悲しさ」や「寂しさ」という心に結晶された気分の頭れです。

しかし「もの楽しい」とか「もの嬉しい」という物言いは、日本語にはありません。「もの」という不思議な大和言葉の裏側に貼り付いていた「もの」、それが断章の如き接頭辞に至るまで、漢字が押し寄せてきても駆逐される事はなかったのです。日本人が忘れていても、失ったという履歴だけは保存されていたのです。神の言葉を頼りにもう少し「ものあわれ」を手繰り寄せる事が可能なら、この島国に辿り着く途中で祖先が失ってしまった「もの」とは何なのか、思い出す事もある筈です。失われた記憶と「ものあわれ」に纏わりつく無常観とは、無関係ではないからです。

他国人が発明した表意表音の漢字、元の意味さえ無視し目茶苦茶な当て字で音だけを継ぎはぎしたのが、万葉仮名による万葉集だったので

その三十一文字に込めて封印され

た「日本人の心」を紐解けば、日本人が失った「もの」とは、実は日本人に日本語を授けて下さった言葉なる神ご自身の事なのかも知れません。

それが、「イスラエルよ。もし帰るのなら、―主の御告げ―わたしのところに帰って来い。」(エレミヤ4章1節)と日本人を探し求める、細い声です。「もののおわれ」という究極のルーツは、ここに淵源を発していたのです。即ち日本人が何かを失ったのではなく、日本人こそ「失われた存在」であったという自覚なき告白です。

### 〈漢文訓読という形而上的国難〉

これに失敗すれば日本人と日本語と日本国はなかつた筈です。ならば今こそ、これを活用しない手はありません。

いにしえの日本人が一大中華文明に伍してこれを訓読し、論語も仏教も自家薬籠中の物としたように、日本人のキリスト者が聖霊によつて次に訓読すべきは西洋キリスト教という「宗教」ではなかつたかという提言です。漢文訓読という超訳は、その為の予行練習だったのかも知れません。

西洋神学の丸暗記と注解書類の二番煎じをもつてしては、伝えるべき福音も日本人の心には届きそうもない事を飽きるほど見てきた

からです。

文法に拘泥しない日本人は成文律法や神学大全にも縛られず、いにしえより「人の思想」と「神のおもい」の間を自由に往き来してきたのです。

しかし、クリスチャンたる日本人の多くは「贖いの賜物」である日本語には目もくれず、おおよそ彼らの関心事はギリシヤ語やヘブル語であり、イングリッシュです。神が日本人に日本語を授けて下さったのは、万葉集の為ばかりではありま

すまい。源氏物語という「もののおわれ」ともあれ、「もの」と「あわれ」か



本居宣長

らなる「もののおわれ」を初めに言い出したのは江戸の国学者である、本居宣長です。しかし

「もののおわれ」とは日本人のいかなる精神構造によるものであるかと哲学的に解明しようとした形跡は、殆どありません。「もののおわれ」という言葉そのものに関しては、考察らしい考察もしなかつたのです。只、一人の女流作家が仮名文字で残した世界最初の恋愛小説である源氏物語は、日本人の「もののおわれ」を描く事において最も秀逸な作品であると文学論として、これを論じたのです。逆説的にい

ば、源氏物語は仮名文字でなければ描く事ができない人間模様だったのです。

もしもこれが万葉集に於ける万葉仮名、音だけを借景した当て字の漢字によつて描かれた作品だとすれば、漢字しか持たない漢民族のように、日本人も失われた存在としての「もののおわれ」を口にすることはなかつたであろうと思います。

本居宣長の慧眼はそういう世界の存在を見逃がさなかつたという点において、極めて卓見であつたという事です。国語辞典における訳知りの解説である「もののおわれ」は「物の哀れ」という誤訳では、分かつたような、分らないような妙な気分なつてしまうのです。

### 〈和辻哲郎と西行の信仰告白〉

その妙な気分に触発された訳でもないでしょうが、和辻哲郎が日本精神史研究の中で曰く、『もの』は意味と物との全てを含んだ一般的な、限定せられざる『もの』である。限定せられた何物でもないと共に、また限定せられたものの全てである。『もののおわれ』とは、畢竟この永遠の根源への思慕でなくてはならぬ。日本的靈性によつてこの告白に辿り着いたとすれば、震撼すべき事です。その時の「もののおわれ」は、文学を超えるからです。

それは己が神から離れ、離され、

はぐれてしまつた民族の記憶に残された断片の修復であり、

「日本人の心」に刻印された、己むに己まれぬ信仰告白そのものだからです。これが日本人の心に等しく宿る「知られない神」(使徒17章23節)に対する思慕の情であり、且つ又、

そうでなくてはならぬと喝破したのです。西行法師も曰く、「何事のおはしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるる」。

二人の告白には、確かにイエスの聖名はありません。しかし日本人が旧約時代に「失われた部族」の末裔だつたとすれば、新約の一条件(使徒4章12節)を以て未信の同胞を断罪する事は極東軍事裁判に於ける事後法、『人道に対する罪』と同じです。いにしえより知らずに拝



西行法師

和辻哲郎

んできた日本人の神様、「知られない神」とは、随神の道（カムナガラノミチ）のその先で見失いせし「イヌラエルの神」、即ち「失われた日本人」を久しく待っておられた神様の事ではなかったかと、思わずにはおれません。

日本人の日本語とは弁論やディベートの方ではなく、神なき世界の虚しさという「ものあわれ」を謳い続ける言の葉に特化し、悠久の時を生きてきたのです。「日本人の心」、即ち「贖いの賜物」をかたじけなく御方への奉獻とする為です。「父なる神」とは、「わたしは、『わたしはある。』というものである。」（出エジプト3章14〜15節）と聖書に啓示され、古事記の冒頭に天之御中主神（アミノミナカヌシノカミ）としてその和名が記されたお方ではなかったでしょうか。

### 〈何という逆さまぶり〉

ですから神に妬むほど愛されている国民とは、日本人の事なのです。それにも拘わらず、皆目それが分かりません。伝える者が分からなければ伝えられる側の者たちは、もつと分からない筈です。それが「ものあわれ」を反転させた「あわれなもの」、即ち1%の理由だったのです。イエスも曰く、『わたしはあわれみは好むが、いけにえは好まない。』とはどういう意味か、行つて

学んで来なさい」（マタイ9章3節）。

それが例の3・11、東日本大震災の時に目撃した日本人の後ろ姿です。大災害のさなか、その意味を神に問わなかったキリスト者は一人もいなかった筈です。暴動や略奪もなく、我先に物を買ひ漁るような光景はついぞ出現しませんでした。そこで目にしたのはバス停やコンビニの前に静かに並ぶ姿であり、一人暮らしの老人を隣近所が気遣う姿です。少なくなっていく水や食料を自分はまだ大丈夫と言い、より困っている人たちに先送りしようとする日本人の優しさと正直さです。

聖書信じる者たちの使命とはキリスト教という「宗教」の拡散ではなく、聖書から『この生き方』を証するだけで良かったのです。彼らに足りないのは知識や信仰や祈りではなく、この「日本人の心」が足りなかったのです（ヨハネ5章39〜40節）。

### 佐藤博プロフィール

1949年、仙台市生まれ。もとより宗教的環境一切なし。37歳にして冷やかし半分、近所に引越してきたキリスト教会を訪問し、初めて「福音」に接する。ある晩、勢い余つて不覚にも信仰告白。その後、友人知人、隣りに人に弁証するも己が力不足を痛感。自らも、何をどういう理由で信じたのか、再度、聖書を点検精査するうちに、「福音」とキリスト教との間にかい離を覚え、やむなくキリスト教会から離脱。著書に「余は何故にして基督教会を脱会せし乎」（文芸社）、「訓読すべきキリスト教」マルコーシユ・ブリケーションがある。

絶賛放送中!

ぜひ、ご視聴ください!

## 「聖書のカ」

毎週日曜日22時30分から15分のメッセージが  
レインボータウンFMから東京23区に88.5MHz  
で発信されています。

あなたに

聖書のメッセージを

お届けします。

YOU TUBE 動画配信中

<https://www.youtube.com/channel/UC051f0whd17XHkabzu62r3g>  
各講師たちのラジオ放送「聖書のカ」  
youtubeでも視聴可能です。

日本民族総福音化運動協議会提供

## お祈りと 献金のお願い

運営のために毎月6万円の必要があります。  
この民福協のメッセージを全国に届けるために奮ってご献金をお願いします。  
ご献金に際しては、「メディア献金」と趣旨を明記してください。

